

滝田紫城伝：福岡藩の洋学

槍垣，元吉

<https://doi.org/10.15017/2334034>

出版情報：史淵. 77, pp. 71-96, 1958-12-10. 九州大学文学部
バージョン：
権利関係：



滝田紫城伝

——福岡藩の洋学——

檜垣元吉

福岡藩の洋学

福岡藩には藩主として蘭癖大名として名高かつた斎清・長溥父子があり、共に好奇心の範囲を越えて近代科学としての意義をもつ業績を残していることはこの文化的生彩に乏しい大藩を特色付ける貴重な要素であると言つてよい。

以上の事實は隔年の長崎御番によつて福岡藩が西洋文化と直接々触する機会を与えられたことに多くを負うもので、藩士中にも洋学に志す者がなかつたわけではなかつた。

寛政の頃には徂徠派の儒者として知られた亀井南冥の門下で、その主裁する甘棠館の助教であつた青木定遠興勝があり「答問十策」「和蘭奇談」「南海紀聞」の著を残している。

ついで志筑忠雄門下に阿部龍平祥熊が現われ「下問雜載」「二国海盟録」の二書を表わした。龍平は蘭学の鼻祖たらんとして研鑽したと称せられるから藩内では興勝・龍平頃から洋学に志す者が現われたとみてよいと思われる。

阿部龍平は文政二年士分に取り立てられた人物で、微賤な身分に発奮して新しい学問に活路を見出さんとしたことが推測され、現存の史料でも彼れはその新知識によつて存在を認められていることが推測される。

阿部良平の養子に忠吉一頁があり、これは藩主に撰拔されてアメリカに留学し帰朝後洋学教師となつたが明治四年に歿

している。

寛政の頃洋学に志したものはこの外支藩秋月の緒方春朗がある。彼れは長崎に蘭医術を学び旧式種痘術ながら種痘の鼻祖とされる学者でシェンナーに先立つこと七年、人痘による接種を試み「種痘必須弁」「種痘緊轄」の著述もある。

シーボルトは前述の二代に亘る藩祖と深交があり、藩士でこの碩学の下に学ぶものも多く今日その事蹟の明らかなものに河野禎蔵・武谷元立・有吉周平・原田種彦等がある。

更に幕末には勝海舟の就学した永井青崖が蘭学者として聞こえたが事蹟殆んど湮滅して管見では「西洋度量考」写本と草稿として書きつぶされた「蘭和辞書」の筆写本を留めるに過ぎない。

前者は彼の自著ではないが無数の書き入れがあつて、彼自身によつて新たに五種の外国尺の図が挿入してあり、中に「勝氏所伝の尺和蘭新尺」との注記がある等青崖の述作に準じてよいものである。

後者は青崖堂蔵の印刷のある美濃紙横罫の用紙に毛筆で筆写したもので最後に「筑藩青井蔵書之印」があり善本であつたことが一目して了解されるものであるが、不幸にも詩文の草稿とされた為僅かにその数頁を解読し得るにとどまり小生の見ることが得たのはその四十六枚に過ぎなかつた。新史料の出現をまたなければこの興味ある、日本歴史の主流に接触を持つ人物の伝記の詳しい事実を知ることが不可能である。

河野禎蔵は明治政府の官僚となつた人で「農家備要」等の著述中にもシーボルトとの交渉を記述して居り、その事蹟の大体は既に知られて居るからここには、同じ理由に基づいて武谷、百武等と共に伝記を省略する。

要するに福岡藩の洋学は我が国諸藩の中に於いて最良の条件を備えながら、必ずしも振わず、更に明治に至つて藩内洋学者の大半がその知識を新時代に活用して歴史的役割を果す機会を与えられることなくして終つたので日本文化の上に足跡を残す人物は稀れて、今日その詳細を知ること多くは困難である。

本稿に述べようとする滝田紫城もかかる不幸な洋学者群中の一人で、その蘭学の研究と述作は約七年間を以て終り英学への切り換えを企てることも為し得ず、藩が明治政府と殆んどつながりを持ち得なかつたことが因をなして豊富にして正確な海外知識を有しながら遂にその実力を世に示すことなくして終つた。

かくして紫城は明治初年には後述するように不安定な生活を送り、明治後半期に至つても村塾経営者としてその才能を十分發揮したとは言ひ難いのであるが、事實は彼の業績が刊行或いは紹介されることがなく世に知られないに過ぎないので彼れの眞価は将来の決定にまつべきもののようである。

紫城は学究として不斷に著述を続け尨大な文献を残した。先ず青年期には儒学に専心し四書及び春秋を除く五經に関してそれぞれ注疏を施しその外左伝に関する八冊本の註釈を書いている。

彼れは折中学の立場をとり、その塾を折中堂と称した程で「折中緒言」によつてその儒学上の立場を示している。要は同藩の大儒貝原益軒の「大疑録」を経とし徂徠の「弁道」を緯として折中学の立場を主張したものである。

学問の本質論に関しては「折中緒言」の外その別録に「主本学旨」「論学本」「学弁」等の諸論文があり家職は儒を以て立つたとは言えぬ彼が積局的に学問と取り組まんとする氣迫を以て努力したあとがうかがわれる。

その後彼が江戸参勤をくり返す間に時世は一転し、ペルリ来航の影響をまのあたりにみるに至つて、同じ江戸藩邸内に住み幕臣にも教えをたれている蘭学者青井青庄に就学することになった。^{註一}就学の期間は極めて短かつたと推定されるにもかかわらず青庄の高弟として藩内或いは藩主にも知られるに至つたものと信ぜられる。^{註二}当時彼は藩主の近侍であつたらその才幹とか技能とかを支配者に認められ易い地位に在つたので、先ず安政五年オランダの馬術家センチールが西洋馬術の伝習を行うに当つて、拔擢されて長崎に赴き約三箇月間学習している。^{註三}

註一 五年（嘉永）公に従つて江都に適く。是より先米艦浦賀に來り朝野騒然たり。以謂らく洋文を解せずば彼の情に通ずる能はず

と。藩士永井青厓なる者有り、蘭書に通ず。乃ち官暇を以て往いて焉を学ぶ。尋いで箕作玄圃父子、杉田成郷等に従つて学ぶ。公西に帰る時青厓と屬がう。(滝田紫城碑)

註二

金武村吉武に建てられた滝田紫城碑にはこの外「藩主曾つて銃身を得むと欲し其の法を得ず、命じて之を索めしむ、乃ち蘭書を閲して之れを獲たり」と記しているから、福岡藩の困難な銃砲の製作に當つて彼れが蘭書を研究して貢獻したことが知られ私の推定では本木正栄が和蘭砲術書ニウエリキ・デル・ボントレキコンスを訳述した「西洋砲術備要」の写本が紫城の手沢本中にかつて存在した。

註三

学習の結果を「西洋砲法略説」としてまとめ安政五年八月「何卒早々御実験有之候而得失を御取捨有之度御座候」と述べ閑屋舎宛に提出している。

紫城の長崎派遣は騎乗の習得のみが目的ではなく、その背景には藩の近代的―西洋的軍備拡充の意図があるわけであるから滞在期間中も絶えず軍事的関心を払つたもののごとく嘉永五年後藤貞芳訳の「騎隊操範」九巻を筆写して歸つてゐるのはその現われである。

註 「騎隊操範」の原本はその凡例によれば「プロフイシヨネール・レクレメント・オップ・デエキセル・シチーン・エン・マヌー
フレス・デル・カファレリー(アムステルダム版一八一五年刊)

その後幕末迄は藩主が藩内の保守的重臣の抵抗の為に難航を続けながらも近代的軍備の為に懸命に努力した時代で、兵制改革と新兵器(汽船購入を含めて)獲得の要求は切実なものがあつたから、紫城の如き人物が重用されるのは当然で安政―慶応から明治の新世を迎える迄は紫城の最も活躍した時代で彼れが藩内の花形であつたことは疑いない。

要するに紫城の身につけた和蘭語の技術が当時の要求によく対え得たと言うべく彼れの事跡は福岡洋学者伝の中に不朽の足跡を残したものであると言ひ得る。

滝田 氏 家 譜

滝田氏はその「家譜」によれば本姓藤原氏、那須の与市宗隆の後で、世々下野に住したが資友(永正元年九月十二日

卒)の時に至つて足利義政に仕え、その子頼元に至つてはじめて滝田氏を称したと言う。

その曾孫助就に至つて毛利輝元を頼つて播州に赴き佐用城主となり氏を福原と名乗つた。その子吉晴は天正の頃下野に帰り宗家(資晴)に投じたが資晴が本領を秀吉に没収せられるに及んで再び播州に帰り名を閑斎と改めて茶道を事とした。

この吉晴はやがて播州を去つて筑前穂波郡直方に来り元和九年二月三日に年七十を以て歿している。恐らく播磨出身の福岡藩主黒田氏のゆかりを頼つてその領国内に移住したもので、吉晴以来の家伝は信をおくに足るものと思われる。

吉晴の子資清(寛永八年没)は主膳静斎と号し氏を滝田に復し、その後四代資久に至る迄茶道を以て業とした。

資清の子安斎の時はじめて直方の黒田氏に仕え、雪窓を経て久左衛門資久に至つて直方領主綱政が入つて福岡の本藩をつぐにあたり主君の信任を得ると共にその住居を福岡に移し、大西新屋敷一番町(今の西新町)中街道の南、西角の邸宅を与えられるに至つた。

資久は小規模ながら滝田家中興の祖とも言ふべき人で初名了意、寛文十年十五歳で当時十二歳の主君綱政に仕え御茶道を勤めた。

延宝四年までに江戸御供四度、御数寄屋奉行となり天和元年春江戸参勤に従つて以後江戸御供十五度、次いで黒田家五代宣政の御供で江戸に往復すること二十度長崎にも数回復来し陸士頭格に進んだが禄は六人扶持二十五石に止つた。

資久の子資直は元禄七年十八歳の時部屋住の身で綱政の御陸士を勤めついで宣政に歴仕、小等原流の礼法に通じたと記されている。

この後資頼―俊昌を経て俊政に至るのであるが、俊政は丘園と号し本論の主人公滝田紫城の父に当り、早良郡金武村松本四郎太夫の子として生れた人物で後年紫城が居を同村に卜する因縁はここに発しているのである。

紫城は深く父親を敬愛し自から父の肖像を描いて後代に残すと共に「丘園翁伝」を草し、その遺詠を編輯して「南洋堂和歌集」とし家譜に於いても父に対する懐仰の念を余すところなく吐露している。少年時代に於ける家庭の雰囲気は紫城の人間形成の上に本質的つながりを持つものであるから俊政の生涯を略述する。

寛政十年二十九歳で家を嗣いだ俊政は劍槍砲術人に勝れ十一年支藩の秋月長舒が長崎御番代理、として長崎に赴いた時には御玄関詰として同地に到り、享和元年には江戸麻布邸の御錠口目附、文化五年十一月朝鮮人大嶋漂着の時には日頃用意の程を示して「平生覚悟能く武器等相嗜むの段」を賞せられた。

其の後長崎御番を続けるうち文化九年石火矢役定助の命があり翌年には武具櫓奉行となり修復奉行を兼ねた。

弘化元年年七十五で退隠した時は

「数年来志宜しく精確勤勞し御用を致し、武技に深く志を立、別して砲術等深く術理を究め、平日覚悟よく武器を相嗜、実母存在中懇切の事方贈致等まで手厚く病中の看護も行届親類の間に信義を尽」した旨

賞賜あつて白縮緬一段を賜わった。当時は国政節儉を主とし賞称等のことも取り止めになっていたにもかかわらずこの賞典を与えられたのであると言う。

退隠後の俊政は丘園と号し猶壯健で家政に携はり菜園を造り一日も晏然たる時はなかつたと云われ安政二年六月六日八十六歳、紫城四十五歳の時に病没した。

その子紫城は名は懋吉（もきち、懋は音ボウ勉励盛大の意）字は世美（つぎみ）幼名梅之進、前髪を除いて久兵衛と称し後懋吉と改めた。紫城はその号である。

嶋井善次の二女・喜代を母として文政五年七月廿七日早良郡新屋敷（西新町修猷館高校の敷地内と言う）に生れた懋吉は七歳習手読書を学び十三歳から武技を修め弘化元年父隠居のあとをうけて家督を継ぎ嶋井諸平正方の女と結婚した。

以下自筆の家譜に基ずいてその年譜を掲げよう。

弘化二年

九月六日 黒田斎清の近侍となる。「老子異義序」を作る。

弘化四年

江戸より帰国途上「弘化詩稿」成る。

五月 斎清歿し免職。

九月朔日 長溥の近侍となる。

嘉永元年

十二月 論語銓几例を作る。

周易折中正義成る。

安政二年

六月六日 父俊政歿。

安政四年

御側筆頭を命ぜらる。

安政五年

二月廿八日 和蘭騎兵伝習の為に長崎に赴く。三月朔日着。(是より先、藩士江戸定府・永井太郎(青崖)に就いて和蘭学を学んだ為で馬術師範安田善一郎を同伴して往く。此の時継肩衣御袴地と金七十両を賜わり七月六日帰国の時には青地硝子盃を与えられて居る。)

「師範蘭人センチュールと称す、伝習として幕府及び佐賀より来れり」

着後当時西洋馬術教授を命ぜられ帰国の翌々日から南馬場で教授、教導凡そ六十余日にして終つた。

安政六年

五月廿四日 御軍法西洋器械御採用御用掛りに任命され人工硝石製造のため屢々志摩郡に赴く。

文久二年

二月廿一日 「五畜療養書」を翻譯献納し恩賜金七百匹。

六月十一日 蒸氣器質問として御船方長崎出張の為、同行取調への命を受ける。

八月三日 英国船コロンビア（紐育製、二百六十馬力、天秤仕掛、外車船購入後大鵬丸と名付けられた）売渡しの承諾を得て帰る。黒田播磨小河讃岐相談の結果、代価三万二千七百七十両。白蠟二十万斤・石炭八百万斤。と決し再び長崎に赴きコロンビアを回航する。

慶応二年

六月十七日 使者として薩藩に赴き島津侯父子に拝謁。

八月十四日 奥頭取役を命ぜられる。

慶応四年

六月八日 長男道助関甫（桐堂）京都詰となり汽船蒼隼丸に乗組博多を発す。

明治二年

十一月十四日 職を免ぜられる。「初め先生西新に在るや塾を折中堂と称へ徒を集めて業を援け、自から経解二十四部を選して之を講ず。負笈の士、門に相踵ぐ」

明治五年

正月 志摩郡鰐石寓居九月帰る。

十月廿三日 長男道助学校営業の建言を県に提出。

明治七年

二月廿八日 宗像郡勝浦校に招聘され九月十二日辞職。

明治八年

八月 早良郡吉武村に移住。九年から十三年迄、折中義塾を開く。

明治十二年

三月廿一日 道助病歿。

明治十三年

正月 小田小学校儒学教師。

十月廿八日 飯塚中学校四等教授、十五年二等教諭。

明治十六年

一月廿三日 志摩郡前原中学校校長兼二等教諭。十七年十二月辞職吉武に帰る。

明治十八年

私塾再開。

明治廿年

十一月 黒田長溥伝、及び碑文撰述の為上京中大患にかかり、学問上の転機となる。則ち「家譜」に謂う。

「病後儒学を廃し農書等を撰述す。（農家日用全書八卷、農字補要三卷、農政路志留遍二卷等）先年福岡に在りし時在勤之晦より經書を注疏し篇をなすものは、（雜著もあり、）

大學釋解	一冊	中庸釋解	一冊
論語銓	四冊	孟子抄筵	二冊
毛詩彙考	八冊	尚書節中	八冊
周易會說	二冊	皇和四家文訳	八冊
神皇記	二冊	明道篇	一冊
漢文自在	二冊	筆道要抄	三冊
左伝觿	八冊	蘆陵叢話	四冊
礼記章義補		折中緒言	前後
農事雜志	八冊		

明治廿四年 三月十二日 （旧）七十寿筵を開く。

明治廿九年 春 大學釋解序を作る。

明治卅年 九月十三日 歿、年七十六。飯盛山下文珠堂の南に葬る。

瓊浦壬戌雜記

文久元年八月君命を奉じて長崎に赴き英國汽船購入の為に活躍したことは先ず彼の履歷をかざる出来事であつた。

紫城はその経緯を記録して「壬戌雜記」と名付けた。先ず六月十一日長崎出張の内命あり、七月十八日炎暑の中を出発、この時暑氣甚だしく寒煖儀を轎中に掛けたるに、九十四度に及べりと記している。當時の文明開化の魁とも云うべき人々と同じく寒暖計、望遠鏡を座右にしていることは興味がある。

前原深江と唐津街道を進めば寒暖計は九十二度八十九度と一上一下する。彼杵から海路長崎に近付くにつれて目的地はコレラ流行の風評しきりである。廿二日長崎到着、廿四日には町役人等に挨拶、中に通詞元木正造があり博多織二筋宛を土産として贈つた。

廿五日製鉄所出方、以後日曜日の外は日々製鉄場に出かけ其の間に急場の用に間にあわせる為ホイゲンスの蒸汽船關係書を翻譯。

八月十一日午後蘭人ラスコイト同道で二百馬力と称するロシア船見学。翌日もラスコイト同道で百五十馬力の露船を検分。その帰路聞役のもとに赴いて来泊英船のことを問ひ合はすとこれは火災に遭つた船であることが判明した。このぼろ船は後に江戸に回航阿波藩に購入されたとあるから当時長崎はいかさま外人ブローカーの巢窟であつたことがよくわかる。

十五日から水揚器械（ポンプ）の図取りを始める。廿七日以後は度々鮑の浦に滞在する蘭人ボーソスト（造船のことを司さどる役名）のレーマン、インゲニール（鍛冶職の上役）のレミーの二人を訪問して鉄船木船の得失を質し、更に英人にも面会して同じ問題を質問しようとするが遂に目的は達成されなかつた。

閏八月六日に至つていよいよ英船を見分するのであるが「殊之外古く馬力は三百馬力外車天秤仕掛なり」とある「外に英船同じく外車の分直ちに見物に参り候処、天秤仕掛は同様なれ共、

一体手堅く車覆にコロンビアの金字あり。即ち米利加ネウヨウク打立にて二百六十馬力、年数十二年今年英人買求上海にて商売運送の為に乗り候由。

売渡之儀相談に及ぶ処今日にても承知致し候様申分に付、直段相尋候処、拾万ドルラルと申。」

評議の結果講入するとするならば、今一応精細に見分致し度い旨通詞を以て申し入れるがコロンビアは翌七日出港、今一艘の船が器械の構造が同一であると言うので午後英国鉄船を見学八日出般帰路につき十二日到着、十五日小書院で黒田播磨小河讃岐の二重臣に復命すると

「御船御取入之儀当年は御参府等御物入多く御手に及ばせられ難しといえども、如何にも取止がたく且は上様にも殊之外御望有之、手元等も不相濟御時勢にも得は色々評儀之上、白蠟式十万斤・石炭八百万に現金一万両当年相渡、来亥の秋式万千七百七十七両相渡候様、急に出崎致し上原賢治と打明け相談致し候様」

註 上原は長崎在住の調役、汽船購入の仲介者である。

と決定したので即刻長崎に町飛脚を立て翌十六日には紫城は再び長崎に向わねばならなかつた。

長崎に着いた滝田は早速上原に相談し通詞稻辺氏を通じて大浦滞在のアメリカ人と「白蠟五十万斤現銀式万両」では如何と折衝を続けた。これより先福岡藩から海軍伝習所に派遣されていた藩士共もこれを聞き伝え

「水之浦伝習之向、不残地方に來り追々承知致し悦事限なし」

とある。

かくて紫城は薩州の蒸汽船天祐丸の書類を調査したり、薩藩の川南清兵衛と往来したりしつつあるうち五月五日午後〇

シア船見物中に問題のコロンビア号が入港して来た。

七・八日と試乗を行い九日には船体の授受が行われたが垢入りが多く終夜排水といった有様で廿日には蘭人のレミー、レーマンが多少器械を分解して点検を行つたらしい。

長崎滞留が猶続くうち笹山東吾と共に崇福寺に仮寓しているフルベックを訪ずれたり、晦日には佐賀藩機関役の士官四人の来訪をうけ、同日七つ過ぎには招待されて薩州五代才助を訪ずれたりして居り後代の有名人物と交渉を持つてゐるのは注目すべきことで松本良順なども深交のあつたことは彼の文集によつてもうかがわれる。

長期間にわたる試運転を終り二十五日長崎出港六つ過ぎ志賀島前に碇泊、「今日車輪の回転一万零五百零七転、習二十六日五ツ時より焚立、四つ過波奈に着船七ツ時揚陸」

「蒸気の迅速なるわずかに一日にして故郷に帰り家人に逢ふて夢の如く思ふのみ。蒸気船を大鵬丸と称す。筑前の蒸気船是を初とす」と言つた状況であつたらしい。

この手記の後段習年六月にはこの大鵬丸が「器械工合悪敷有之に付見分として乗込」とか

「工合悪しきに付筒形（シリントル）解離之申合致す」

等々この老朽船が極めて厄介な存在であつたことを物語る記事が続いている。

南 行 紀 程

慶応二年六月第二回長州征伐のさ中に紫城は命を奉じて薩摩に使することとなつた。彼れの生涯に於ける第二の晴れの舞台であり歴史的意義も大きい出来事なので彼もこの旅行を記念して「南行紀程」一卷を残している。

慶応二年六月十六日別宴を張り十七日に旅程に登るのであるが途上到着の戦塵の名残を留めている。雑掌に至つて同行

の杉原正文主従と合し二日市を過ぎて松崎の宿に至れば前日四千余の肥後兵の通過した直後で一日早かつたとしても宿はなかつたろうと挨拶される。

隈城川（筑後川の交流）の渡舟を待つ間に出会つた島原藩士は上の関に於ける彼れの見聞を伝え、長州藩が巨大な松材を筏の如く組み合わせ港内に浮かべて敵船に備えていることを語り船中でも長州勢の小倉攻撃の話で持ち切りである。紫城も心細くなつて里心を起したらしく「余旅途未だ央ならざるに」「懼起懷起懷郷之情」と記している。

瀬高の宿でも駅舎の門外に者頭等の姓名が掲げたまになつて居り此処で大部隊の勢揃いが行われたことが物語られてゐる。

植木ですれちがつた薩摩の医者養寿院は豊前街道が通行出来るかどうかを心配顔である。熊本八代を経て更に南下、湯の浦の辺に至れば助郷の人馬意の如くならず小役人が宿場頭を杖で搦打する騒ぎで貧農の辛苦に同情を禁じ得なかつた。

廿二日長島を右に遠望しつつ薩摩領に入り米の津、伊集院を経て廿五日鹿兒島築町の客館に到着した。町役人の迎接も懇切で藩主の命によつて温雅な伊藤某が来訪慰勞に努め、廿七日には後世名を成した吉井幸輔が使者の口上を聴取すべく来訪、翌日には正庁に於いて薩藩主に謁し使命を果している。

今日如何なる内容が伝達されたかは明らかでないが、当時は長州再征失敗、將軍家茂薨去（七月）の直前に当り、福岡藩は幕命に迫られて国境に出兵を行つても従来のいきさつから前面長州後方薩州の夾撃を警戒しなければならぬ様な有様で、この際薩州側に連絡或いは了解を求める必要のあつたことは言うまでもないから紫城の責任は軽いものでなかつたものと考えられる。

紫城も「幕府長州の罪を討つや、離間大に行われ説士遊客動もすれば人心を煽惑し」と長州征伐の余波に動揺する不安な福岡の有様を叙述している。

一応使命を達成した紫城一行はその後薩藩主の命によつて薩藩の軍事施設を詳細に視察した。この時紫城の觀察し得たものは後世の史家にとつても重要なものであると信ずるのでここに紹介する。

廿九日船奉行の鱸川弥九郎が訪ずれて鹿児島沿岸の砲台と製鉄所を見学させよとの君命を伝達、明日と言うのを押し切つて即日十六門の砲を裝備した弁天砲台を見学、天保、大木戸、祇園洲砲台を望みつつ、鱸川から薩英戦争談を聞いて驚歎之を久しうした。

次いで集成館に到ると館長は長崎で旧知の竹内氏で長崎出身の本庄某も此処に勤めている。館内を巡観すると、
「設置六十馬力蒸氣局。別造大機局城。工既及半。石質如浮石稍堅緻。勝於西洋磚瓦遠矣。又有鑄彈場及製鉄葉彈（ブリッキドラス）処。」
「見磨暴母（ボム）彈及獵列決兒（ブレッケル）尖彈。」
「英夷所發射。獲諸土中者。尖彈大非把握所及。」
「門外左側有距夷鉄製大礮七十五門。供対岸砲台用云。彈量百八十封度為最大。」

薩藩苦心の結晶である天草石製の耐火煉瓦や、英艦の不発アームストロング砲彈等を見学していることがよくわかる。
吉井幸輔は外客の応接係だったらしくその後帰期を問いに訪問、七月四日出発を確かめて帰っている。

凡そ薩藩領内に入ると駅毎に郷導者を出すとその人物は蓬頭垢面、衣は膝を蔽うに足らず、一条の木綿を袴とし、腰に長剣を横たえ足にあしなかををはき、むつつりと前となり後となりついて来る。紫城の旅行は炎暑の盛りなのだが、この国の人足共は險阻に登れば涼風に向つて一人長嘯する。衆声連りおこつて群猿の叫ぶが如くであると言う。薩摩氣質が目あたりに浮び上つて来るようである。

紫城等が帰着したのは七月十二日で翌日復命返信を提出藩主は二人の使者を慰勞すること優渥であつた。

経 学

紫城がはじめ經學を以て立つたことは既にみる如くである。中道にして蘭學を學び大いにその才を發揮したこと、生涯その學術に海外の新知識を積極的に摂取して特にその農學の上に一体系を樹立したことは後述する通りであるが、私はその思想の根底に儒學が尚生命を失うことなく存在していたと考える。

紫城は七歳にして就學、最初は吉井蒙叔に従つて読書習字を學習することから始まつた。間もなく蒙叔の病没に遭い亀井門下の石川玄斐に學んだ。

玄斐は柳川出身の儒醫で附近に寓居し、母親の病氣を診療したのが機縁となつたものらしい。

紫城の文集には天保十五年四月の「石玄斐の柳川に歸るを送るの序」と外に「玄斐に答う」の一文が収められていて、前者によると

「君嘗つて醫を以て余が家に出入す。其の時に當つて余甫めて十五六。詩書を誦読し亦徒らに晤啍の聲音を習うのみ」であつたのを数々余が爲に指教を与えて呉れた

「もしさきに余君に遇わざれば何を以てか今に至らん」

と言つてゐるから天保九・十年の頃に當つて學恩を蒙つたものであることが知られる。然らばこの文章は廿一歳の作で文の内容によれば帰郷後の玄斐は醫を以て立花侯に仕えたらしい。

後者によると紫城は玄斐から「本草穿要」五卷を借用して謄写中で、後年の彼れの學問から逆推して青年期の彼れが既に博物學に興味を示している点が注目され滝田農學の出発点は或いはこのあたりにあるかもしれない。

石崎玄斐が故郷に去ると直ちに十六歳の紫城は亀井陽州に入門、所謂亀井學を學んだ。彼れが折中學に赴く原因は既にこの時代から育まれていたと考えてよからう。

弘化元年家を繼ぎ翌年江戸に登つた紫城は當時の諸碩學の聲咳に接する幸を持つことが出来た。「安積良斎に就いて經

義を質し夙に井上金莪の説を嘉し自ら折中を以て經学の方針と爲す」とはその墓誌の記すところであるが、その学問的な努力はかなり多方面に亘つて行われ或いは物徂徠の墓を訪づれば涙を灑ぎ、「〔祭徂徠先生文〕 筑前藩邸に臨んで魯論を講ずる佐藤一斎の風采を目のあたりにしてこれを機縁として「就一斎先生論学啓」を草している。

「都人士の俗孰れも經史を誦読せず南雅を誦誦す。故に其の祖述する所必ずしも濂閩之学を範とせず、間ま異見を挾はさむ所有り」

これ大都会たる所以かと東都人文の規模の大なることを述べた後、「幼にして程朱の教を学び稍長するに及んで私園の学を好み自から以て是と爲して復其の他を顧みなかつた」と述べ「江戸に遊んで井上金莪・山本北山の遺教を聞き乃ち前修を厭棄して、自からあきたらず炎漢已降を雜取して宋明諸学にいたり、一に聖旨を折中して新たに自己の学問的立場を表明したところ一二好學の士によつて支持されたが一般からは迂にして不遜なりと考えられた。

たまたま世子の侍読を定むるにあたつて、紫城が候補にあげられたが遂に実現しなかつた。紫城はこれを千歳の恨事と考へ敢てこの文を草して大先生に呈しその忿懣の心を慰める、と言うよりも出来得るならば新しい地位を獲得しようとしたものようである。

「老親堂に在る、居恒某をして学に勤めしめ以て望を他日に期する也久し」

と彼の前を通り過ぎようとする輝やかしい地位に対して恋々の情を述べて哀切を極めているが、結局彼れの悲願は実現されなかつたし、果してこの文が一斎に奉呈されたか、どうかは明らかでない。

註 「一日一斎先生に謁す。談話畢（音キ時の意）を移す。実に宿儒也。嘗つて藩邸に來り魯論を講ず。言密にして旨遠く

詩文奇処無しと雖ども氣象凡ならず」下略

江戸は學問の淵藪であり青年紫城が多くをこの世界有数の大都会から學び得たことはその著作をみても明らかである

が、結局折中学的傾向を執るに至つたことは前述の通りである。

彼れは師を求め、書を求めて倦まず、恐らく当年の少壮学者の多くがそうであつた様に名士を歴訪して何物かを得んと摸索したものらしい。

市河米庵の門を叩いたのもその一つの現われと考えることを得るであらう。

註 「市三亥書を以て聞こえ都下第一と称す。寛斎の子也。賀

州侯之臣爲り。太子延いて師と爲し筆法を授く余嘗て接聞するを得。年七十余。身材長大矍鑠恢偉目光炯々として人を射

る。被髮して道服を衣、龍頭紅漆の刀を佩ぶ。就いて之と語るに言弁にして隠姦雄畏る可し。」下略（以上「壬癸雜識」）

この或る意味では恐るべき学芸の世界の中で、紫城は折中を以て家学の宗とするに至つた。恐らく當時の学界に於ける動向に基ずく判断であつたと思われる。

紫城の学問に関して「大疑録」「弁道」を学んで先ず程朱を疑い、石井蘭州の「非物篇」、中井竹山の「非論語徴」を読んで得るところ多かつたという所伝もあるが、懷德堂の諸学者との交渉は現在史料を欠くのでしばらくこれを措く。

註 「余も又十八九の頃誤つて童孺の見到馳せ其説を信せしに、其後大に悔恨し年二十四にして東都に役し始めて折中学あ

る事を聞、諸儒を叩て其説を与り聞ことを得たり。」

「近世信州の人井上金峨始めて折中学を唱ふ。其学漢宋諸儒の説を合し其中善なるをとり専ら中を聖旨に折（さく）といふ義なり。是より石川滄浪山本北山太田錦城皆川淇園等みな其説を主張す。」とは彼れがその自伝に記す所である。

猶少年時代の勉学についての資料を附記しよう。「余十歳斗の頃郷先生に就て四書五經を授読し小学孟子の講を聞けり。程なく先生没せしかば業を發せしに四書五經ともに皆忘れて終篇を誦する事能す。因て玉篇大成と元字引書を求めしにて四書五經共に右の字書より引出して字義訓話等を覚」

折 中 義 塾

紫城後半生のエネルギーは折中義塾の経営に注がれたと称してよいのであるが、この私塾にはそれなりに断続起伏があり一応その跡を追つてみる必要がある。

紫城の「折中堂記」はこの要望に対えてくれる文献の一つでその中で彼は

「初め余官暇吾が党の諸子を教授す。海内鼎新の後文学四もに起る」

と僻陋の地に至るまで文運大いに興る時世となつたことを述べ、

「余折中学を唱うるを以て、四方嚮然として来り質正する者多し。家塾狭窄已に容るる能はず」

ここに於いて諸子相謀り書室を築くこととなつて営業のことを助けたので以て衆を容るるに足るようになり「乃つて旧号を襲つて命ずるに折中を以てす」と言つてゐる。

これでも知られるように紫城は世子の傳となり得る丈けの自信を持つていたわけであるから經学の教授を請うものがあり、官暇小規模な塾が出発した。

それが明治維新に際会して社会的混乱も起つてはいるが、やがて動乱が一段落すると学問熱が昂揚して私塾ブームの時代が生まれ、西新町に於ける最初の折中塾も大いに栄えた。その状況を示すものに午九月改の「折中堂姓名志」と称するものがあつて塾生の数を知ることができる。午九月とは明治三年庚午の年と推定される。

松 本 稜 威 士

泊 俊 太 郎 (純一郎)

堀 演 六 郎 (兵哉)

井 上 蛙 住

吉 田 誠 叔

河 村 五 三 郎

羽 石 藤 次 郎

高 木 出 谷

多 久 武 雄

江藤英純	土方練太郎	広末重四郎
原平蔵	岩瀬元	石松泰
筒井茂	吉見均	松本虎三郎
竹林三良	屋成峰次郎	多久仁太郎
筒井満	中山錫	印野小弥太
吉井栄	高田英雄	武藤辰五郎
井上立樹	片岡又三郎	村田澄雄
江守正銘	長沢宿	藤井守
庄野種彦	尾本庸六	

以上がこの連名簿の前段で明治三年前の入塾者を列記したものである。次いで

明治三年正月十三日

武藤慶次

同年正月廿一日

松島鴈四郎

萩原才吉

中村幾三郎

高石勝三郎

樋口次吉

吉良養甫

前田常次郎

岡藤勝太郎

同年正月廿五日

津田蝶次郎

同練三郎

世良田鑽造

荒津芳夫(栗野慎一郎)

以下猶明治四年辛未二月三日の吉安時次郎に至るまで以上の外七十七名の入塾者が挙げられて居て、出入はあつたにしもかなりの塾生をかかえた私塾が明治四年の終迄維持されたことが想像される。紫城の学識もさることながら洋学をも

併せ学んだ彼れが新知識の所有者として多くの学生をひきつけたものと思われる。

この西新時代の折中塾に頭山満・栗野慎一郎等が学んだのであった。

金武村羽根戸に健在の井上忍氏は少年時代吉武の滝田家に出入された方であるが、当時の頭山の直話として塾で頭山（前記の姓名志の廿二番目に見える筒井満が後年の頭山である）が栗野（当時は荒津考夫）を欺いて犬肉を食わせ後で栗野が閉口した話、紫城の令嬢が塾に度々遊びに来られる。そこでここは女の来る所じやないといくら言つても仲々言うことを聞かないので、遂に頭山が椽側から蹴落し、それがあとで先生にわかつたが何とも言われなかつたという逸話がある。頭山は四年の閉塾後、草場乱の塾に移つたと考えられるが後年紫城が塾教育に使用した「玄鑑千字文」を印刷し師恩に報じている。

ここで一応明治に入つてからの紫城の起居を眺めると、

二年十一月十四日

職を免ぜられる。

四年 四月十五日

退隠。

五年 正月

志摩郡鰻石に寓居九月帰る。

七年 二月

宗像郡勝浦校。

九月十二日辞職。

八年 八月

早良郡吉武村移住。

而して九年から十二年迄の四年間が吉武村に於ける第一期の折中塾である。その後
十三年正月

小田学校儒学教師。

十月廿八日

飯塚中学四等教授。

十六年一月廿三日

志摩郡前原中学校長兼二等教諭。

十七年十二月廿日

辞職して古武に帰る。

十八年

折中塾再開。

となるのであるが今日折中社の社規が残っているからここに掲げる。

社 規

一、平常之交接ハ勿論切磋之上ニ於テモ信義ヲ主トスベシ

一、読書之時間ヲ定メ其間ハ吾席ヲ離ルルヲ禁ス

一、読書之時ハ音声ヲ詳明ニシ漫然看過スベカラス

一、經學講義ノ外他ノ弁論ヲ禁ス

一、争擾喧嘩ヲ禁ス

若シ他人ヨリ非理ノ事狀ニ及ハ、静ニ開説シ尚聞入レサルアラバ社長ニ先訴スベシ敢テ抗弁セハ理アルモ却テ罪科ニ致スベシ

一、他人ノ器月書籍ヲ借り粗略狼藉スベカラス

若シ損シ失亡等ノコトアラバ償ヒ返スベシ

下足等ニ而モ其主ニ通セズシテ私ニ用ルヲ禁ス

一、近隣及ヒ塾傍ノ竹木草物等ヲ破折スルヲ禁ス

凡近辺村民ノ妨害トナル様ノコトヲ禁ス

一、用事ノ外近隣ニ往キ無用ノ閑話ニ日ヲ消スルコト勿レ

一、夜行ヲ禁ス

若シ不得已用事有ノ節ハ其儀ヲ社長ニ申達シテ後行コトヲ免ス

一、塾中ノ畳窓及他物ヲ破リ疵付ル等輕重ニ因リ適宜ノ罪科ニ当スベシ

一、当直ハ掃除ヲ密ニスベシ

若シ疎略ノ者再三相続テ是ヲ命スベシ

一、凡違犯ノ罪科預メ一二ヲ定メ置其他事ニ臨ミ衆議ヲ以定ムベシ

一、幼者長ヲ凌キ長者幼ヲ侮トルヲ禁ス

右須知

折 中 社

罰 科

掃除 賞金 放社

農学 日用 全書

明治十八年六十四歳で金武村に帰つた紫城は退隱の氣持であつたと思われるが、その余生は必ずしも平穩なものではなかつた。先づ長子桐堂・道助は才能もあり氣概にも富んだ人物であつたのが既に十二年三月に歿して居り、その家庭ではこの老殘の篤学者を悲しませることのみ起つた。

廿年の末東京の黒田家から長溥の伝記と碑文の撰著を依頼されたことは彼れの晩年をかざる事柄であつた。しかし上京中に煩つた脚氣は彼をして儒学を廢して農書の著述に赴かしめる転機となつた。

儒学は本来経世の学としての性格を有するものである。然りとすればその延長の上に農学を展開することは必ずしも矛盾しない。その大成されたものが「農家日用全書」と称せられるもので、この本は農用雑書とも呼ばれたもののようである。

「農学日用全書」は八巻より成るもので、この碩学の頭脳が猶健在であり、短時日の著作ではなく長い準備期間を持つものであることがよく示されている。

この書は植物性体、土壌、時候、元素成分、肥料、穀類、菜蔬、葉菜、叢物、果実、養蚕、雑草の諸篇によつて構成され、精緻な近代的農書としての価値を有するもので紫城が最晩年の精根を集注したことは疑う余地がない。

恨むらくはこの書は未刊のままに埋もれ、従つて紫城の農学者たることを知る人は殆んど絶無と考えられるのであるが、一つの問題が我等に残されている。

それは明治の農学者として知られた同じく早良郡出身の林遠里との交渉である。天保二年鳥飼村に生れた遠里は明治維新後若くして農学に志し先ず勸農新書を著わして明治前期の日本農業に貢献し、後には勸農社を創立して子弟を養成し、農場を各地に設置してその理論を實踐し自から各地を歴遊し或いはその門下生を派遣して農事の改良に努め、次第に拡張された勸農社が各府県の請求に応じて農業教師を送り出すこと三百余名に達したという。遠里は紫城の死に後れること九年、明治三十九年、紫城と同年の七十六歳を以て歿しているのであるが、両者の関連がもし明らかにされることがあれば紫城の農学は必ずしも孤立したものではなく、或いは遠里の農学を支える一翼として重要な意義を持ち得た可能性を持つものである。

この二人の老農が相識の間柄であつたことは明らかで一通の書翰ながら遠里が紫城に向つて朝鮮事件の年に送つたものが残存して居る。

遠里は当時の不景氣の事實を挙げて出版の困難を述べた後

「然しながら別段先生に御願申度出版物有之候ニ付（則農家培養必携と申書籍）

もし御差支も無之候は、別紙之通り日々年中植物種類蒔肥し等一切之植物を三百六十日間に一日も間日無之様相成丈け
実地植付て実効有之候様御編纂奉願候、御編輯料は三円差出し可申に付右に而来る八月十日直に御仕上ケ奉願候也

別に参考書等御入用に御座候は御申越被成次第有合在之分直に御送達可申上也」

と記している。恐らく紫城が尨大な日用全書の出版を依頼されたものの出版の見込みが立たず、活動家の遠里が多少氣
の毒に感じたものか通俗的農業書の執筆を依頼したものであろう。

この書翰に関する限り紫城の立場に同情せざるを得ないが、しかし問題は他の未だ明らかでない面に於いて紫城が如何
にその農學を推進し、明治農業にどの程度に影響を与えたかであつて、私はこの學問に対する情熱を最後迄失わなかつた
紫城が單なる村童の教育家でなかつたことが明らかになる時を期待する。

残念ながら紫城に関する史料の多くは散逸して了つたが、詩文の草稿の紙背などに注目すべき材料が残されていること
もあつて、更に研究の余地が残されていることを思ひしめる。次の例は前文の欠けた草稿ながら、明治初期の帰農士族の
動向を物語るよき史料であると思うので附記しておきたい。

「士族ノ困難急迫ヲ救護スルノミナラス実ニ当県ニ於テ蚕業ヲ隆起シ近傍諸県ノ嚆矢トナリ、皇國ノ大利益ヲ成ンコト
ヲ希望スルノ婆心沛乎トシテ己ムコト能ハス状願クハ規則草案ノ本末ヲ御亮察被下速ニ所願之通二万円の金額十五箇年間
御給与被下度段奉願候也」

後記 この小伝は先づ紫城の蘭學の詳細に関する研究と儒學者としての業績を將來の問題として残した。前者に関して

は筑前洋学の全貌に関する見通しと紫城周辺の人々の著述を研討する必要がある、後者に関しては現在「折中緒言」等の主著を手許に持たない為である。猶此の小論は吉武村の滝田家、羽根戸の井上忍氏の御助力と教示に多くを負うものであり、又本学の箭内教授を代表とする昭和三十三年度科学研究費の援助を蒙るものであることを記し感謝の意を表する。

The Life of Shijō Takita

—A scholar of western learning—

by M. Higaki

The *Fukuoka* Clan was given the duty to guard *Nagasaki*. In spite of this convenient situation to learn the western civilization, the fruitful result was not effected. The reason was that the *Fukuoka* Clan failed to swim with the current of the

time at the *Meiji* Restoration and that for the retainers of the Clan to take active part in the new government was very difficult. Thus the new culture was kept out of doors for this Clan.

The hero of this essay is one of the unfortunate scholars. Under Seigai Nagai, Shijō learned the Dutch language together with Kaishū Katsu, an able representative of *Tokugawa* government. He exerted himself to prepare the modern armament for his Clan and persuaded the Lord to purchase the steam ships. He also went to *Satsuma* as an ambassador and made a great contribution. At the beginning of the New Age, he became a teacher of a private school. Having an excellent ability, was he not one of the great but buried progressive scholar?

Supported by the Confucianism, he made up his mind to return to his very start and cultivated the new agricultural sphere upon the scientific spirit.